

# パキスタン—コインで知るパキスタン—

小田尚也

## ●紙幣とコインの無い独立

一九四七年八月一日に英領インドよりパキスタンが（独立当初は東西パキスタンに分かれ、東パキスタンは一九七一年にバングラデシュとして独立）、翌一日にインドが独立した。英領インド最後の総督マウントバトウンによる英領インドの分離独立案発表から実施に移行されるまで二カ月というわずかな時間しかなく、また広大な植民地をインドとパキスタンに分轄するという実作業もあり、混乱と課題を残したままの独立であった。例えばカシミール領土問題は端的な事例であり、現在に至るまで印パ間未決の深刻な問題となっている。パキスタン建国の父と称される独立運動を指揮していたムハンマド・アリー・ジンナーが結核により寿命が限られていたなどの理由が挙げられるが、何

故、マウントバトウン総督が分離独立を急いだかは、印パ独立前後を詳細に記したLarry Collins and Dominique Ripierreによる*Freedom at Midnight*（一九七五年出版。邦訳『今夜、自由を』早川書房）など、二、三の書籍を紐解いても明確な理由はわからない。因みに印パを分轄する国境線をラドクリフ・ラインと呼ぶが、この作業は弁護士でありインド国境委員会議長を務めたC・ラドクリフによって行われた。彼は議長となるまで英領インドを訪問したことすらなかった。ラドクリフはラーホールにあるフアラティーズホテルの部屋に籠もり、その重責故にノイローゼ気味になりながら分轄ラインを引いていったと前述書には記されている。そのラドクリフが分轄案を提出したのは両国が独立するまで一週間を切った八

月九日のことであった。

さてこの早急な分離独立によってパキスタンで準備できなかったもののひとつが紙幣と今回の特集であるコインである。一九四七年の独立時、パキスタンは独自の紙幣を準備することができず、英領インドで使用されていた紙幣とコインが使用された。紙幣に関しては、英領インド紙幣の印刷を加えて使用していた。コインは英領インドのコインがそのまま使用された。通貨単位は英領インド時代のルピー (rupee) を使い、独立当初の為替レートは、インドルピーとパキスタンルピーは等価であった。一九四八年四月からインドのマハララシュトラ州ナーシクにあるIndia Security Pressでパキスタンオリジナルの紙幣の印刷が始

まる。そして一九四八年七月一日に日本の日本銀行に相当するパキスタン中央銀行がカラチに設立され、ようやく国内でパキスタン独自の紙幣の印刷が開始された。コインは同年ラーホールの造幣局において製造が開始された。ラーホールの造幣局は第二次世界大戦中、日本軍のビルマ侵攻がさらに西に及ぶことを恐れ、カルカッタ（現コルカタ）の造幣局の機能を移転したものであった。ラーホールでの製造が始まったものの、当初は製造が間に合わず、インド側のカルカッタやボンベイ（現ムンバイ）の造幣局でもパキスタンコインが作られた。またロンドンのイギリス王室造幣局で製造されたコインも存在した。英領インドのコインはその後一九五二年七月までパキスタン国内で使用可能であった。

## ●コインの単位、デザインなど

パキスタン初のコインとして一九四八年に次の七種が導入された。一パイイス (pice)、一／二ア Anna (anna)、一ア Anna、二ア Anna、一／四ルピー、一／二ルピー、そして一ルピーである。パイイス、Annaはルピーの補助通貨単位である。英領インドで使用さ



写真1 左から5、2、そして1ルピーコイン。上段はそれぞれ表面、下段は裏面である。5ルピー表面は三日月に1つ星、裏面は数字の5。2ルピー表面は5ルピーコインと同じ、裏面はラーホルのバードシャヒーモスク。1ルピー表面はパキスタン建国の父ムハンマド・アリー・ジンナーの肖像。裏面はシンド州ジャムショロにあるスーフィーの聖人であるハズラット・ラルル・シャバース・カランドール廟 (撮影: 山根 聡氏)



写真2 左は5パイサコイン、右は10パイサコイン。どちらも現在使用されていない (撮影: 黒崎 卓氏)

れていたもので、交換比率は1ルピー＝16アンナ＝64パイサであった。一九五一年にはパイサより下の単位であるパイ (Pai) コインが発行され、交換比率は1パイ＝3パイ (1ルピー＝192パイ) であった。この英領インドの補助通貨単位は一九六一年一月一日に10進法に移行するまで使用された。新たに導入された補助通貨単位はパイサ (Paisa) で、1ルピー＝100パイサと設定され、この年、1パイサ、5パイサ、そして10パイサの三種のコインが導入された。その後、2パイサ、25パイサ、50パイサが発行されるが、補助通貨パイサコインは物価上昇の影響により徐々に使用される機会が減り、一九九

四年に铸造停止となった。現在ではパイサコインは使用されていない。現時点、市場で流通するコインは、一、二そして五ルピーの三つである (写真1)。二ルピーは一九九八年に、五ルピーは二〇〇二年に導入されたコインである。二〇一三年五月末時点の日本円とパキスタンルピーの交換レートは、1パキスタンルピー＝100円である。

一九四八年に初めてオリジナルコイン七種が発行されてから現在に至るまでのコインの形状、材質や裏表のデザインは幾度となく変更されたが (四角いコインもあつた。例えば一九九四年まで現役だった五パイサコイン (写真2))、一つを除きすべてのコイン

コイン表記に残された。

### ●おわりに

今では日常生活でコインを使う機会が減ってきている。五ルピーは使われるものの、町中のお店では1ルピーや二ルピーはあまり使われなくなっている。会計時に適当に切り上げ、切り下げをし、最小の釣り銭を五ルピーにしたり、コインの釣り銭がないようにする場合が多い。今回の特集用の写真にと自宅の引き出しにあるパキスタンコインを探したが、出てくるのはインドコインばかりでパキスタンコインを見つかることはできず、大阪大学大学院言語文化研究科の山根聡教授および一橋大学経済研究所の黒崎卓教授にコインの画像提供をお願いした次第である。

### 謝辞

本稿の執筆に際し、一橋大学経済研究所黒崎卓教授、大阪大学大学院言語文化研究科山根聡教授から貴重なコメントならびにコイン写真の提供を頂いた。ここに感謝を記したい。

(おだ ひさや/立命館大学政策科学部教授)